

# 日本の英語学習環境に 適した「「フォーカス・オン・ フォーム」アプローチ」

高島英幸  
Takashima Hideyuki

平成23年度より順次施行される小・中・高等学校の学習指導要領の外国語活動・外国語（英語）科の目標を並べてみると、8年間を通じて「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が共通項である。学習者が真に伝えたい内容を題材とした授業を組み立て、意欲を持って活動に取り組ませることが必要となる。どのような言語活動を授業に取り入れることで、このような力を培うことができるのかを、筆者の提案する「「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ」（高島、2011）という手順を切り口として考察する。

## 中・高等学校の学習環境に見合う 「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ

フォーカス・オン・フォーム（Focus on Form, 以下、FonF）とは、学習者がコミュニケーションを行う中で、語彙や文法などの言語の形式（form）に意識を焦点化する（focus）ことである（Long, 1991）。つまり、学習者が英語を使う時に、どのように語句や表現を使えば意図することが伝わるのかを体験して理解するプロセスである。

FonFの実践には、2つの形態がある。1つは、英語を第二言語として学ぶ（ESL）環境で、FonFがタスクと呼ばれる言語活動を中心とした指導（TBLT: Task-based Language Teaching）として取り組まれる場合である。もう1つは、日本のような英語を外国語として学ぶ（EFL）環境において、教科書を用いた教材の提示、次にその練習、そして、その産出という順序で、いわゆる、P（presentation）、P（practice）、P（production）という手順の中で取り入れられる場合である。これは、「タスク支援の指導」（TSLT: Task-supported Language Teaching）と呼ばれ、FonFの手法を指導のどこで用いるかが重要となる。学習者が文法説明で学んだ文法知識を活用できる言語活動を用意し、文法説明と言語活動を有機的につなぎ、フィードバックとしてもう一度文法に関する確認をする一連の授業の流れが最適であり、筆者は、これを「「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ」として提唱する。FonF、PPPと「フォーカス・オン・フォーム」アプローチのおおよその授業の流れを表1に示す。

表1 FonF、PPPと「フォーカス・オン・フォーム」アプローチの比較

学習の流れ	➔		
フォーカス・オン・フォーム (FonF) (ESLの学習環境)	—	課題解決的な言語活動	文法説明
PPP	教科書（文法説明・練習） (P・P)	言語活動 (P)	—
「フォーカス・オン・フォーム」 アプローチ (EFLの学習環境)	教科書（文法説明・プラクティス）	課題解決的な言語活動	文法説明（必要に応じて練習）

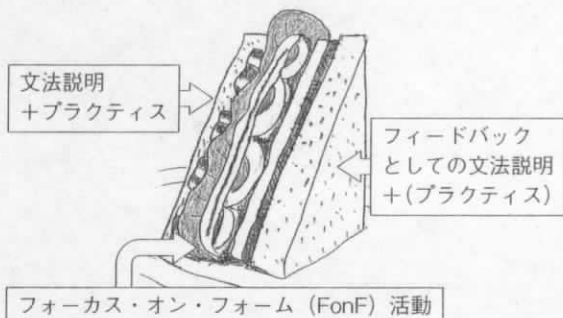


図1 「フォーカス・オン・フォーム」アプローチのイメージ

「フォーカス・オン・フォーム」アプローチでは、表1のように「文法説明・プラクティス＋課題解決的な言語活動＋文法説明」という手順となり、言語活動が文法説明で挟まれる図1のようなサンドイッチができあがる。このように FonF の活動を文法説明で挟むことで、美味しい授業ができあがることになる。当然のことながら、パンも具もそれぞれに厳選する必要がある。

### 認知比較を援用した文法説明

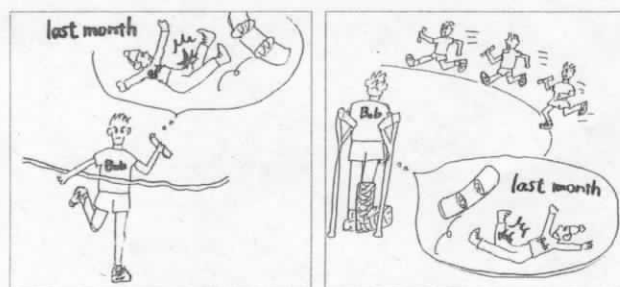
「フォーカス・オン・フォーム」アプローチにおける文法説明では、英語と日本語の語順の違いなどを比較 (cognitive comparison) し、学習者に違いなどに気付かせ・理解につなぎ、その知識を次の言語活動で利用できるように準備させる。また、いつ、どのように、なぜ特定の文法構造が用いられるかという use に関わる知識を与え、理解させることで、場面に応じた正確かつ適切な言語使用ができるように説明することが大切となる (高島, 2011)。

### FonF を取り入れたプラクティス

形式 (form)、意味 (meaning)、場面や意図 (use) の3側面を理解させた後には、理解を深めるための練習段階が必要である。例えば、「過去に起こったこと (過去分詞形の動詞の内容) が、現在も何らかの影響を受けている (have / has) ことを表わすのが現在完了である」と概念を確認する。次に、文法説明と連動したプラクティスを実施するのである。

このプラクティスでは、Bob has broken his leg. という英文を聞かせたり見せたりして、その

状況を示すのはどちらの絵かを考えさせる。図Aは、Bobが先月足を骨折したが、今は完治してリレーで一位になっている絵である。一方、図Bでは、Bobは先月の骨折が治っておらず、リレーに出場できていない。A、BのどちらもBobが足を骨折している絵であり、has broken という現在完了の形式 (form) が、「足を骨折したという過去の出来事が、骨折が治っておらずリレーに出場できないという現在に影響を持っている」という意味で使われていることが理解できれば、Bの図を選択することができる。



図A

図B

### FonF 活動としてのタスク活動

FonF を取り入れた言語活動であるタスク活動 (高島, 2005) は、ペアやグループで行うインフォメーション・ギャップ型の活動で、指導しようとする文法項目を使用するようにデザインする。これは、特定の文法項目に焦点を当てさせるため、Focused Task と呼ばれる。例えば、現在完了形と過去形を比較・使用させることを目標とした「タスク活動」では、旅行の目的地を決定するものなどが考えられる。簡略版パンフレットと2枚のシート (A・B) を用意し、「あなたの情報」の部分 A、B のシートで変えておく。これ以外に複数の国を用意しておき、それぞれの情報を交換して、どこの国に行くかを決定させるが、学習者は情報を伝えるときに I have skied before. や I have been there twice. などの現在完了形を用いてコミュニケーションを楽しむことになる。このように、コミュニケーションをする中で、伝えたいことを英語にするときに現在完了形という形式 (form) を使う経験をさせることが重要である。

タスク活動では、学習者が作成者の意図どおり

## 〈簡略版旅行パンフレット〉

☆New Zealand☆

- ・ Enjoy hot springs in nature!  

- ・ Try sheering sheep & making wool!  

- ・ Try rafting & skiing!  
 

## 〈Sheet Aの情報〉

## あなたの情報

- ★2回行ったことがある。だからニュージーランドには詳しい。
- ★おじがニュージーランドに10年在住。
- ★羊の毛刈りの経験あり。結構楽しい。
- ★ラフティングはやったことがある。最高に楽しい。

## 〈Sheet Bの情報〉

## あなたの情報

- ★ニュージーランドには1度も行ったことがない。
- ★温泉は好き。
- ★スキーは経験あり。やってみたい。
- ★ラフティングはしたことがない。
- ★兄はラフティングをしたことがある。面白いらしい。

に目標文法項目（上記の例では、現在完了形と過去形）を使用するとは限らない。また、誤って使用する場合もある。そこで活動の後にはフィードバックが必須となる。言いたかったのに言えなかった表現や、学習者に共通する誤りについて、どのように言えばよかったのかをクラス全体で考えさせたり、現在完了を使った方がよいことを確認する機会を持つことが必要である。「[フォーカス・オン・フォーム]アプローチ」では、これを言語活動の後の文法説明として位置づけている。

## ことばの「学習者」から「使い手」へ

英語教育の目的は、英語で自分の思い、考え、気持ちなどを伝える活動を通して、より深く、広く、また、柔軟な発想で物事を考えることができるようになり、同時に、学習者の心を育むことである（Cook, 2002: 334）。機械的な口頭練習や暗記したことを言う活動だけでは、学習者は単なる「ことばの学習者（language learner）」であり、コミュニケーションを可能とする「ことばの使い手（language user）」にはなれない（同書：339）。練習などでことばを学習することに留まらず、ことばを使う体験を学習者にさせることが大切なのである。そのためには、日本語との違いや使い分けなどを理解させ、練習させ、課題解決型の言語活動を通して、必要に応じて文法説明とさらなる練習をする「[フォーカス・オン・フォーム]アプローチ」で授業を創ることが求められる。

また、学習者の発達段階に適した活動とするために、内容が学習者の興味・関心と相応しているかをニーズ分析などで調査し、教室外でも十分対応できる基礎力を育成する必要がある。教室内の言語活動を、いかに学習者にとって身近で役に立つものにするか、学習した文法項目をどのように言語活動に組み込めるか、学習者が積極的に取り組むことのできる活動は何か、などの点を常に意識した活動を工夫することが教師に求められる。

## ◆引用文献

- Cook, A. V. (2002). Language teaching methodology and the L2 user perspective. In V. Cook (Ed.) *Portraits of the L2 user* (pp. 325-342). Clevedon: Multilingual Matters.
- Long, M. (1991). Focus on form: A design feature in language teaching methodology. In K. de Bot, C. Kramsch, & R. Ginsberb (Eds.) *Foreign language research in crosscultural perspective* (pp. 39-52). Amsterdam: John Benjamins.
- 高島英幸（編著）. (2005)『文法項目別 英語のタスク活動とタスクー34の実践と評価』大修館書店.
- \_\_\_\_\_. (2011).『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』大修館書店.

（東京外国語大学大学院教授）